

小谷城跡の研究 (1)

丸山竜平・深貝佳世*

A Study of the Ruins of Odani-jo (1)

Ryuhei MARUYAMA and Kayo FUKAGAI

はじめに

これまでに小谷城跡の調査・研究は幾度もなされてきた。(註1)しかし、それらの多くは遺構、わけても郭の分布状況の全容を次第に明らかにするといった、貴重な成果をもたらしたものの、さらに一步踏み込んでその構造を縄張論から解明し、その事実から具体的な史実やその性格を探るといったところまではほとんど及ぶことがなかったといえる。小論も先行研究に学び、その成果をもとに小谷城を構成する城郭群について、さらに細部の遺構にまで及んで検討・分析を加え、ひいてはこの城跡の特質と歴史的事実について、あらたな問題を提起しようとするものである。しかし、小谷城跡は規模雄大で容易に全容を明らかにすることは不可能であり、このため今後幾度かに別けて詳細を報告していくつもりであるが、ひとまず今回は、湖北地域に占める小谷城の位置・位相を、分布論および縄張論から大まかに概観し、その築造年代ひいては築造契機を明らかにしてみたいと考える。

1. 分布論のなかの小谷城跡

まずはじめに、小谷城跡の所在する湖北地域における城郭、ここでは山城に限定するが、の分布から概観し、小谷城の位置・位相を明らかにしていきたい。

ここでのべる湖北地域とは、大きくは近江もしくは琵琶湖の北部地域を指すが、越前に続く山麓丘陵を含み、流域河川でいえば、小谷城跡の西を流れる高時川・余呉川流域と西野山、城跡の南を流れる草野川・姉川流域の広い平野部、さらにはこの平野部の南端を、山丘を縫うように東西に流れる天野川の流域および南の犬上郡に連なる山々ということになる。

いわば小谷城跡から望み得る眼下の平野部すべてを包括することになる。また、この地域がそのまま小谷城主浅井氏が支配権を及ぼした、いわば浅井氏の領域支配を支えた家臣団・地侍層の分布範囲にも相当する地域である。郡名でいえば、伊香郡、東浅井郡、坂田郡の三郡となり、南は湖東の犬上郡と境を接し、東は岐阜県・美濃国、北は福井県・越前国と交わる場所である。このため平野の繋がらない琵琶湖の最北端・塩津から越前・敦賀へ抜ける筋道にあたる西浅井町の城郭群はここでは湖北の地域から除外している。このように歴史的地理的範囲を念頭においた湖北地域は、対象行政地域としては1市11町(長浜市、余呉町、木之本町、高月

*名古屋女子大学日本文学科3年 歴史学同好会会長

町、湖北町、びわ町、虎姫町、浅井町、伊吹町、山東町、近江町、米原町)である。

この地域の山城は現在総数35城を数える。ただここで述べる山城とは、山頂や尾根筋上、あるいは山丘の上などに築かれたもので、しかも堀切もしくは堀切堅堀を備え、あわせて土塁囲みの郭からなる遺構をその定義とするものである。それゆえ仮に土塁を備えた郭が存在しても堀切や堀切堅堀が認められないもの、あるいはその逆のものはここでは山城としては扱わない。それらについては今後の山城研究に重要な役割を果たすものとの見通しを持つため、山城遺構としてこの論稿の2回目以降で問題としたい。なお、北から南に向かって逐一市町の山城を概観しておきたい。その意図は、これまで山城として一括呼称してきたものを、構造的な観点から分類し、時代的なものを縦糸としながら、小谷城解明の糸口を探っていくためである。

さて、その山城分布の状況は、別表1とその分布図が示すように、各市町においてかなりのバラツキがある。特に、この地域の最北部を占め越前に繋がる余呉町域においては14城(なにがしかの遺構や砦などをも含めると39城となるが)もの多くの山城が認められる。

その理由は、結論的にはこの地域で、一部木之本町をも含み込んで、柴田勝家と秀吉とがいわゆる賤ヶ岳合戦をおこなったために多数の山城が築かれたことにある。

事実、山城は整然とした土塁とそれに伴う横堀を備え、以下に述べる戦国盛期の山城とは、一目見て時代差が読み取れる。一言でいえば平面立面共に定規で引いたような城である。たとえば、具体的には、土塁であれば、その幅、高さにおいて、その大小、高低にかかわらず、凹凸がほとんど認められないものである。このことは横堀の幅、深さについても指摘しうるところである。

さて、余呉町の南に接する木之本町では、さきに触れたように、余呉町の濃い密度に反して、田部山城と田上山城(木之本城)の2城が認められるにすぎない。これがさらに余呉川を南に下った高月町では、その西側を高時川が広い平野を伴って南北に貫流するにもかかわらず、わずかに磯野山城1城しか認めることが出来なかった。しかし、この山城は梯郭式の典型的な山城で、主要な郭の前後を執拗なまでに幾重にも堀切堅堀を設けた強固な城で、その年代もほとんど土塁らしい土塁を伴わない、土塁が発達する以前の築造になるものと推定された。ここでは梯郭式の古式山城として位置付けて、後に再度評価を加えてみたい。

さらに高月町の南に続き、高時川の作る平野が広がり、西は琵琶湖にも面する、つまり湖上交通との係わりが視野に入ってくる湖北町では、琵琶湖側に山本山城が築かれ、その北には同じ尾根続きで今のべた磯野山城が築かれている。そして平野を東に挟んで小谷城が大嶽山頂から尾根筋にかけて築かれるが、その山麓に近い平野部の独立山丘上には丁野山城と中島城が築かれる。前者・山本山城は小谷城の支城であるが、支城以前には在地領主が一時山城を築いたことが予想されるが、いまはその面影はない。この点についても後にふれる。後者の2城は浅井が信長と対峙するなかで応援に駆けつけた朝倉が築いた小谷城の出城とされるものである。ここでは小谷城を加えて都合4城を数えることになる。

次に、南のびわ町では背後に山丘を持たないため、勿論山城は皆無である。他方、虎姫町では、対岸小谷城と対峙して信長が秀吉に築かせた虎御前山城が1城認められる。小谷の付け城である。

一方、姉川に面して北側に位置する浅井町では、湖北町にまたがる小谷城を除くと、その安定した平野部と背後に控えての山城築上に相応しい丘陵あるにもかかわらず、かつまた姉川合戦前後以来、信長との敵対関係のなかで築城の機会と必要とがあったと考えられるが、なぜか1基の山城も、本格的なものは築かれてはいない。この点も浅井氏を考える場合重要であり、

後に再論したい。

さらに、姉川の南に広がる広大な平野部と背後に丘陵地を持つ長浜市では、横山城と名越ごえの砦が臥竜山尾根筋上に築かれる。それでも、平野の規模と丘陵の位置からみて、僅かに2城しか認められないことはあまりにも過少すぎるのではないと思われる。

しかし、平野の規模と山城の数とに必ずしも整合性が認められないことは、長浜平野に限ったことではなく、他の地域においても明瞭に指摘し得るところである。

さらに、臥竜山を隔てての東側・山東町では長浜市にまたがる横山城や名越ごえの砦を除くと、岐阜・美濃との国界となる尾根筋上には、野瀬山城（長比城）や須川山砦が所在する。さらに町域の南、山間部には八講師城が築かれている。また、山東町の北側に続く、伊吹山の聳える伊吹町では、南端、天野川の左岸に位置して、辛うじて山城と認め得る村木山城が所在する。土塁も低平で、尾根を挟むように両側から迫る竪堀状遺構も従来の山城遺構には及ばない脆弱さが感じられる。また、伊吹山の山腹にはかなりの高所にもかかわらず弥高百坊城が営まれており、続きの東側尾根筋上には上平寺城が位置し、その山麓部には寺院を用いての平地城館が知られている。伊吹町では以上のように都合3城となるが、うち2城は佐々木京極氏の山城であり、他の1城は明瞭に山城と断言するには極めて微妙なところがある。その評価は他の類例資料と共に考察しなければならないものであるのでここでは触れない。

湖北の地域でも南端にあたる天野川流域では、湖東地域の六角氏との勢力関係の中で、その領域関係が常に微妙な位置関係にあった。しかもその下流部を占める近江町では、琵琶湖に面して平野を抱えるが、この河川の右岸には山城の築造はない。他方左岸では、それも米原町にまたがるところで地頭山城が1城認められるのみである。（山城遺構をとどめない顔戸山城（一の城）については後述したいのでここでは触れない。）さらに南の犬上郡との境となる米原町では、琵琶湖に面して磯山城（虎ヶ城）、内湖に面しては太尾山城が築かれ、山間部に入っては鎌刃城と枝折城がある。東西に連なるように4城を数えることになるが、地頭山城を加えると5城もの城がひしめく勘定となり、さらに本来なら南の佐和山城も浅井氏の支城であるからここに加えて6城で、この地域と浅井・六角両氏の関係を検討すべきであろう。うちこの地頭山城も枝折城も山裾に明確な城館が認められないのでここでは他の山城同様に詰めの城ではなく、「境目の城」とみなしてよいかもしれない。同じことは臥竜山の名越ごえの砦についても、ここでは横山城との関連でそのように評価しておきたい。

以上のように西浅井町を除く湖北の広大な平野部に連なる地域には、合わせて35城が築かれていたことになる。各市町別には余呉14、木之本2、高月1、湖北4、びわ0、虎姫1、浅井0、長浜2、山東3、伊吹3、近江1、米原4である。

次にこれらの山城について、その構造を概観し、合わせて大まかな年代観をあたえ、大略の分類を試みておきたい。この作業は後論とかかわる在地の城をより厳密に抽出せんがためである。

余呉町では14城（遺構群を加えると総数39となるが）と突出した数を数えることになったが、この点については当地の城構造がその経緯を雄弁に語っており、すでに賤ヶ岳合戦との関連で説明した通りである。同じことは木之本町の2城についても言えることである。また、それぞれの地域のなかで概観しつつ、指摘してきたように、残る19城のうち、湖北町の中島城と丁野山城の都合2城と虎姫町の虎御前山城1城の計3城は姉川合戦以降の浅井氏と信長との敵対関係から築かれた城であった。いわば在地の城ではない。伊吹町の3城と山東の3城、さらに米原の4城が残されたが、このうち、山東の境目の城である野瀬山城と須川山砦さらには米原の境目の城となる、磯山、太尾、鎌刃、地頭（近江町）、枝折はいずれも賤ヶ岳合戦時に築かれ

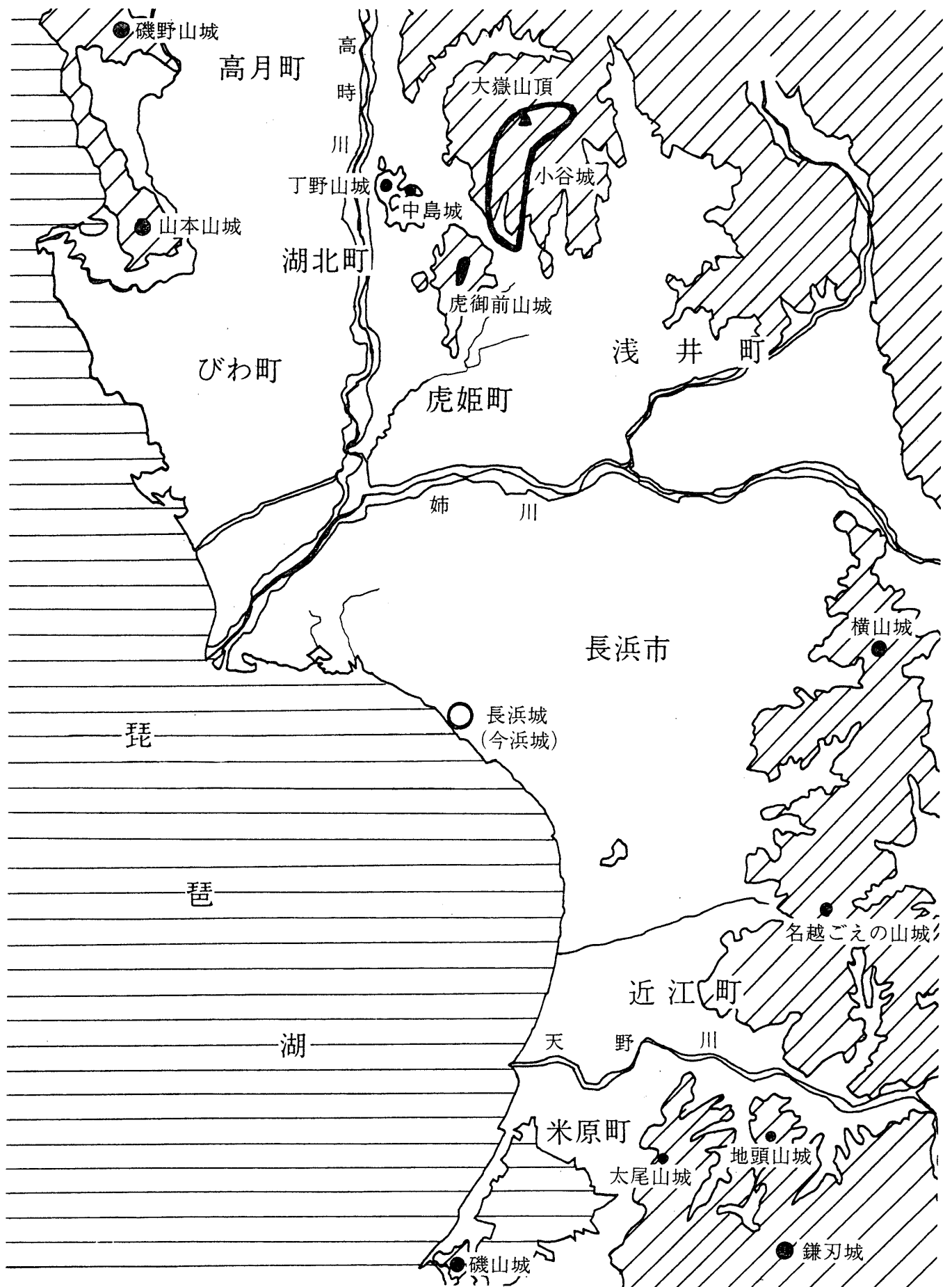
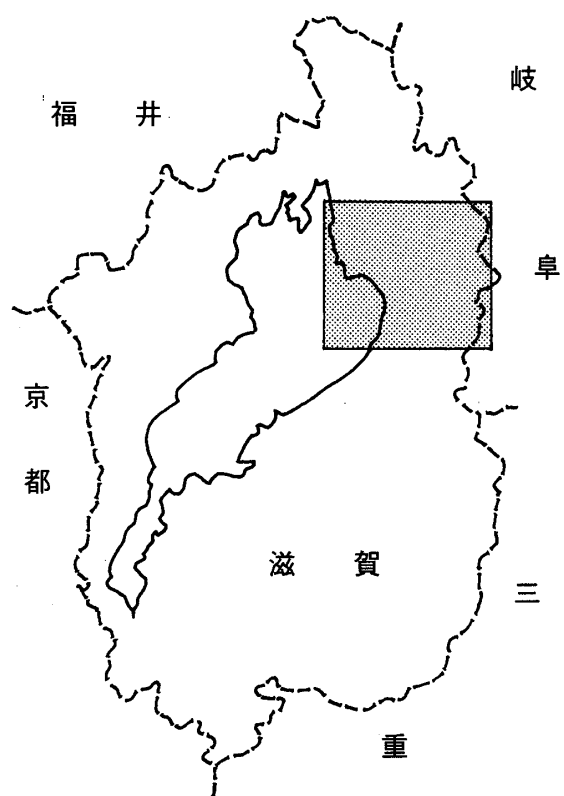
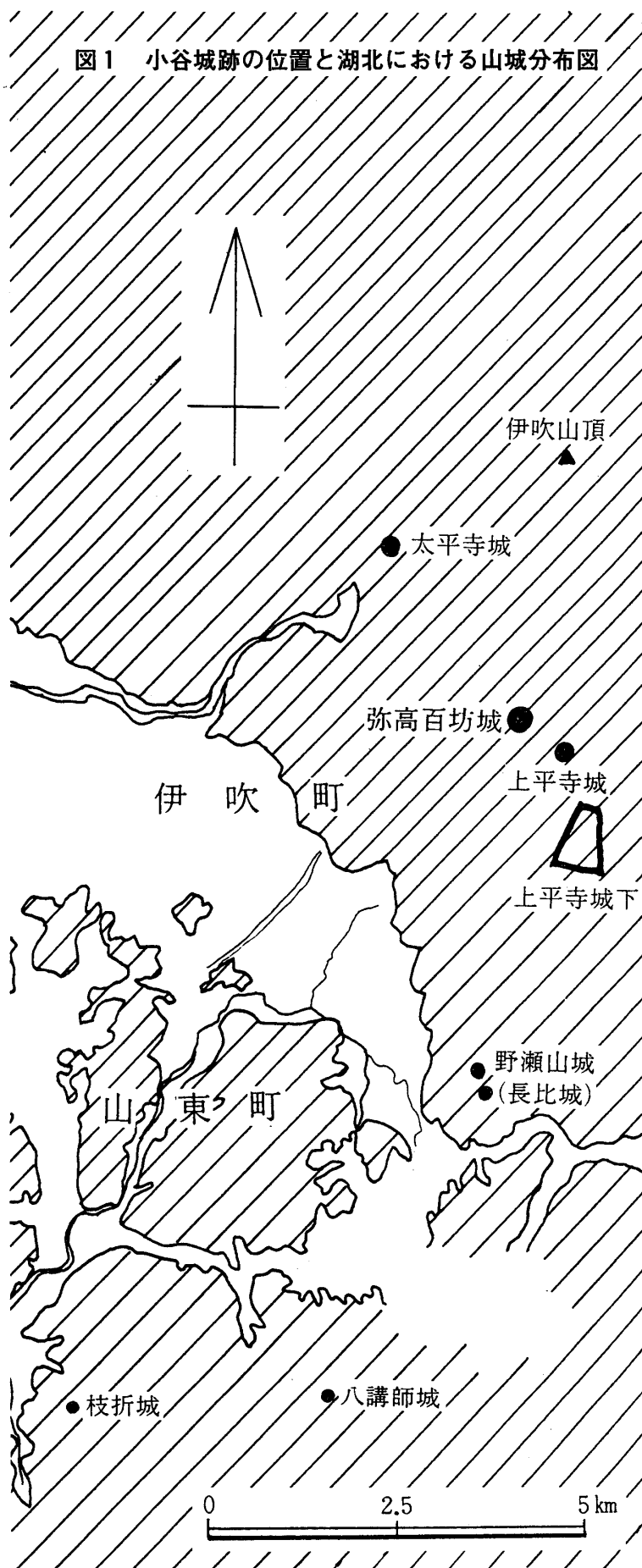


図1 小谷城跡の位置と湖北における山城分布図



湖北の中世山城一欄表

1	小谷城 (大嶽・郡上焼尾等諸城を含む)	湖北町(伊部、郡上、美濃山、丁野、下山田、上山田) (浅井町須賀谷)	平地、山／林、田	信長公記、菅浦文書、織田文書の研究、浅井氏三代文書集、朽木文書、佐久間軍記、言繼卿記、長享年後畿内兵乱記、鹿苑日録、嶋記録所収文書、古絵図、坂田郡志
2	弥高百坊城(刈安尾城Ⅰ)	伊吹町弥高	山／林	近江の城、信長公記、浅井氏三代文書集、嶋記録
3	上平寺城(刈安尾城Ⅱ) 上平寺館 上平寺南館	伊吹町上平寺	山／林 山麓／林 山麓／林、田、宅地	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録、坂田郡志、浅井三代記江北記、嶋記録、古絵図
4	磯野山城	高月町磯野	山／林	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録、近江輿地志略、伊香郡志
5	山本山城(阿閉山城)	湖北町山本	山／林	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録、近江輿地志略、信長公記
6	中島城	湖北町丁野	丘／林	信長公記、原本信長記
7	丁野山城	湖北町丁野・山脇	山／林	日本城郭大系、東浅井郡志、信長公記
8	横山城	長浜市石田町、村居田、鳥脇、朝日	山／林	伊香郡志、東浅井郡志
9	名越こえの山城(砦)	長浜市布施町、山室	山／林	
10	野瀬山城(長比城)	山東町長久寺	山／林	坂田郡志、東浅井郡志、信長公記、嶋記録
11	須川山砦	山東町柏原、長久寺	山／林	
12	八講師城	山東町梓河内	山／林	日本城郭大系、坂田郡志
13	虎御前山城	湖北町河毛、虎姫町中野	山／林	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録、東浅井郡志、信長公記、織田文書の研究
14	田部城	木之本町田部	山／宅地	日本城大系、東浅井郡志
15	田上山城(木之本城)	木之本町黒田	山／林、公園	信長公記、織田文書の研究
16	村木山城	伊吹町村木	平地／宅地	日本城郭大系、坂田郡志
17	地頭山城	近江町、米原町三吉、寺倉	山／林	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録
18	磯山城(虎ヶ城)	米原町磯	平地／宅地	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録、信長公記、嶋記録
19	太尾山城	米原町米原、西門寺	山／林	日本城郭大系、近江輿地志略、嶋記録所収文書、嶋記録
20	鎌刃城	米原町番場	山／林	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録、近江輿地志略、嶋記録所収文書、信長公記
21	枝折城(土肥城)	米原町枝折	山／林	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録
22	玄番尾城(内中尾山城)	余呉町柳ヶ瀬、敦賀市刀根	山／林	日本城郭大系、近江輿地志略
23	大谷山砦、小谷西方遺構群	余呉町小谷	山／林	近江輿地志略、余呉庄賤嶽物語附録
24	行市山砦	余呉町池原	山／林	日本城郭大系、近江輿地志略、余呉庄合戦覚書、余呉庄賤嶽物語附録
25	柏谷山砦1の砦	余呉町小谷	山／林	余呉賤嶽物語附録
26	椽谷山砦	余呉町小谷、池原	山／林	日本城郭大系、近江輿地志略
27	今市上砦西陣砦	余呉町今市、東野	山／林	
28	東野山城(左称山砦)	余呉町東野	山／林	日本城郭大系、近江輿地志略
29	菖蒲谷砦	余呉町東野	山／林	余呉庄合戦覚書、賤嶽合戦記、余呉庄賤嶽物語附録
30	天神山砦(片岡砦)	余呉町国安、天神前	山／林	柴田退治記、余呉合戦覚書、賤嶽合戦記
31	堂木山砦	余呉町中之郷東野	山／林	日本城郭大系、近江輿地志略、柴田退治記、余呉庄合戦覚書、賤嶽合戦記
32	神明山砦(大杉山砦)	余呉町八戸	山／林	日本城郭大系、滋賀県遺跡目録、近江輿地志略、余呉庄合戦覚書
33	岩崎山砦	余呉町下余呉	山／林	近江輿地志略、余呉庄合戦覚書、余呉庄賤嶽物語附録、賤嶽合戦記
34	大岩山砦	余呉町、下余呉、坂口	山／林	近江輿地志略、余呉庄賤嶽物語附録、賤嶽合戦記
35	賤ヶ岳砦	余呉町川並 木之本町大音	山／林、公園	日本城郭大系、近江輿地志略、信長公記、桑田忠親著『太閤書信』

た山城とはことなり、明らかにそれに先行するものであった。それゆえ山麓に在地の有力領主である地侍層の平地城館は認められない。あるいは枝折、名越ごえの砦は山下に居館が予想されるが判然としない。このためここでは、浅井氏の支城もしくは境目の城とみなしておく。

すなわち、山城と平地城館とがセットとなり、山城イコール詰め城といった理解がスムーズになし得るものはかなり限定されてくることになる。具体的には、この広大な湖北のなかで詰め城と認定し得るものは、高月町の磯野山城と伊吹町の弥高百坊城および上平寺城、そして湖北町の小谷城の計4城しか明らかに成し得なかったことになる。在地の領主としては磯野氏と京極氏そして浅井氏の3氏のみであったといえる。

湖北における詰城・山城の実態をより明らかにするために、同じ琵琶湖に面する湖西がわの北部に相当する高島郡の山城の築城状況を見てみよう。

高島郡の現在の耕地面積は、伊香・東浅井・坂田の湖北地域と比較しておよそ2分の1程度であり、町村の数も1郡で5町1村を数える地域である。現在山城は7基知られており、1町1基あたりとなる。北から見るとマキノ町では、浅井氏とも姻戚関係にあった田屋氏が田屋城を詰め城として築いており、平地には沢村城が遺存している。また、今津町では伊井城が県下でも最古の山城として築造され、平地には三谷城が認められる。おなじく新旭町では、日爪城が山城として築かれており、平地には吉武城が所在する。しかもこの高島郡内で、ここ新旭町のみ、2城が認められ、もう1城は佐々木高島氏の本城である清水山城がその詰め城である。この地域のみ2城ある勘定となる。なお、ここにも平地の館として井ノ口館など清水山山麓館群が段丘上に広がっている。その規模は広大である。

さらにこのような詰め城の山城と平地の城館との整合性は安曇川町での上寺城と田中氏館でも知れるし、高島町では、山城・打下城と大溝城との間に予測される。また最後となったが朽木村での西山城では、山麓に朽木城が所在し、それぞれよく対応していることが伺われた。

先にも述べたが、このような詰城の関係が湖北で不明瞭なのは、おおくが本来の詰め城ではなく、支城や出城、あるいは「境目の城」だからであろう。

両地域におけるこのような差異は、けして生産力の差から生じたことでないことは、現在の資料ではあるが、朽木村の耕地面積が20、103aと極めて低いにもかかわらず山城も平地の館も築いていることからいえることである。

その評価としては、浅井氏が領域内の有力領主層に一切の築城行為を牽制していたことに寄るのであろうが、佐々木高島氏のもとでも本来主上の関知しない築城は謀反とみなされ成敗の対象とされたに違いない。このような想定に立つと両地域の詰城における築造分布の密度、といっても湖北では京極氏以外の詰城の築城を浅井氏は認めることはなかったものとみなし得る。すなわちその違いは、両地域間の最高権力者の在地支配の形態の違いに起因するものではなかったであろうか。しかもそれは支配形態の差異にとどまらず、権力者の専制の度合を反映しているのではなかろうか。

例えば、湖北地方では、磯野氏以降は、成長しつつあった有力地侍層が、背後の山頂部に詰め城を築き得るほどには、領域支配者と伯仲した勢力を築き得なかったが、在地の村落の中には、あるいは接するような位置には平地の館城を築いていることが一般であったようである。そして、その規模も、勿論複郭ではあるが、数基が結合し、溝を、あるいは堀を共有する形態をとるもので、大規模であった。ところが高島郡の詰め城は清水山の高島氏の場合を除いて、他の5城がいずれもこの平地に築いた城館を山の上に築こうとしたものであって、戦闘用の詰め城を築くまでには至らなかったことが判明する。ただ伊井城は時期が溯るものであるせい

か、あるいは築造契機が異なったためか、居館型の詰城形態ではなかった。このような山城の構造からも、有力地侍層を援助することによって詰城を築かせ、それを支城とする連合体制のなかにも高島氏の相対的な専制権力の弱さが読み取れるのではなかろうか。

このような観点で、いま高島氏の清水山城と小谷城、上平寺城とをその規模において比較してみよう。まずその高さであるが、清水山城は安曇川平野が一望に見渡せる、海拔226.3mの高所に位置している。しかし、かたや小谷城は、大嶽山頂が494.4mの際立った高所に有り、小谷山の支脈上でさえ最高所は398mであった。その高さの違いに中世の権力の有り様が伺われるのである。さらに、上平寺城は669.0mを測り、弥高百坊ではさらに高く750mを数えるものであった。

城郭の数、規模においても、小谷城のそれが削平地、即、郭とはいえないものの、およそ1100カ所を数えており、それに比して清水山城では僅かに20前後にすぎなかった。

これを郭の数の単なる比ではなく、主郭群の数・規模でみると、小谷城では、山王丸から桜の馬場西郭を経て番所までを見ても、山王丸3カ所、京極丸5カ所、中ノ丸6カ所、本丸1カ所、大広間一ヶ所、桜の馬場2カ所、番所まで7カ所と規模の大小があるもののおよそ25カ所の主たる郭が認められるのである。これに比して、清水山城では比べ得るものは天主相当の中心郭部分1カ所のみであった。

また、上平寺城で各郭の規模が総じて大きく、8郭を数えたが、とうてい小谷のそれに比べ得るものではなかった。もしこれに弥高百坊も一体として加えるのであれば、さらに30カ所以上を加えねばならないことになる。この場合にはその数が38カ所を越えて小谷城の25カ所を上回ることとなる。しかし、いずれにせよ、清水山城の規模が小谷城や弥高・上平寺城に比してきわめて弱小であったことが伺われるのである。

以上によって、湖北では京極氏と浅井氏の両者のみが(磯野氏については後述する)平地城館に対応して詰めめの城を築きえたこととその背景・権力の在り様とがこれら城郭群の様子からも臆気ながら明確になってきたといえる。

2. 小谷城跡と弥高百坊城および上平寺城

詰城の在り様から湖北における京極、浅井両氏の位相が大略概観でき得た。そこで次に、両城の比較検討を通じて、それぞれの権力の質的相違に焦点をあててみたい。このことがまた、京極氏に取って替わった浅井氏の評価を与えることになると思う。まず、小谷城跡と弥高百坊城との大まかな比較を試みるならば、前者が山尾根上に、いわゆる梯郭式により大規模な郭群をほぼ一直線に配置するのに比して、後者は、伊吹山中腹の幅広い尾根上に、全幅を用いて広がる中世寺院遺構をほぼそのまま採用・踏襲して築いた山城である。このため弥高のそれは参道を、中央に軸線のように配置し、その奥に本堂・主郭、左右に坊跡群・郭群といった構えとなり、総構えとしての南門に虎口を設けてもそれぞれの郭に複雑な虎口を設けるものではない。京極氏はこれ以前にも同じ伊吹山中腹の太平寺に城を構えたとされており、山城に山岳寺院を用いていることに注意さるべきであろう。ただ、当時は年代も古くてか、城の構えと寺の構えとの差異がいまださほど明確ではなかったものか、現在残る当地の遺構は、寺院址として知れるのみで、山城の要件となる堀切もしくは堀切・堅堀もまた当初より存在しなかったものと考えられる。

この点においてまず、浅井氏と佐々木京極氏との大きな差異を汲み取らなければなるまい。なお、同じことはさきに触れた高島郡清水山城においても指摘し得るし、佐々木六角氏の居城

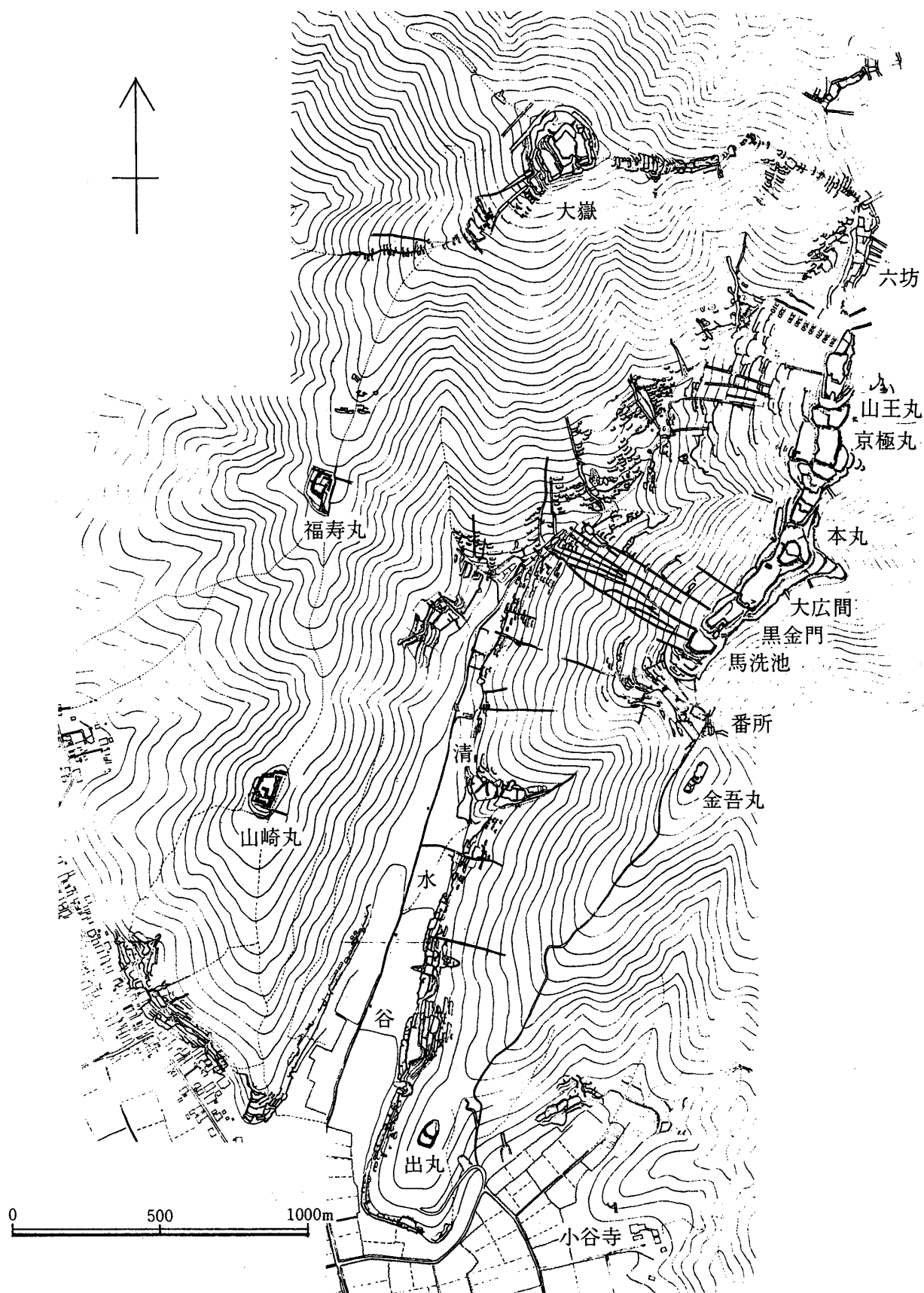


図2 小谷城跡遺構分布図 (依「滋賀県中世城郭分布調査7」)

である安土の観音寺城においてもしかりであった。前者では山麓部に近い山腹の谷筋を用いて、やはり参道を中央に配して左右に郭が整然と配置され、奥の右手には本堂跡が予想された。このことから六角、京極、高島いずれの佐々木氏もが、古い寺院の施設を占領し、おそらく土地支配形態をも踏襲しながら、在地支配を押し進めようとしてきたと考えられる。そうすれば、そのような姿をとらない浅井氏の在地支配には、その城郭遺構とともに当時としては斬新なものがあつたのではなかろうか。

なお、京極氏は占地した寺院のその構えを踏まえつつも、可能な箇所から改変を加えたようであり、とくに遺構として伺われるものとしては郭を囲む土塁を新たに設け、総構えの前面には空堀を設けて防備を固め、さらに遺構全体を包括的に防御するため、中心郭の背後後方や前面の尾根筋上の要所には長大なそれでいて幅広く巨大な堀切、あるいは堀切縦堀を穿っていた。その規模は城郭、堀共に県内屈指のものであつた。

以上のことから京極氏は、寺院建物もしくは寺院の遺構を利用した山城の築城を試みて太平寺から弥高寺へ本城を移し、さらには城下太平寺との間の背後に上平寺城を築いたことが知れるのである。ここに浅井氏との相違が明瞭に浮かび上がって来るのである。当初、京極氏は寺院を占拠し、寺院経済のなかであるいは莊園制度のなかで城の経営をなし得たが、後には城下を構え、背後に詰め城を構えて、浅井氏と相並んで存在したことが読み取れるのである。

そして、このような城郭遺構の差異から、浅井氏が京極氏をなぜ凌ぐことが出来たかについての輪郭がみえてくるのではなかろうか。

3. 小谷城の築城時期とその契機

浅井氏の戦国大名への変貌とその実態をより明らかとするために、小谷城跡の築城についてその時期と契機を探っていきたい。しかし、本来的に、城郭と呼ばれるものは改築、増築の繰り返されるものであつたし、築造当初のものが廃城時期までその痕跡だけでもとどめるものは類いまれと予想される。この小谷城跡に関してもその危惧はまぬがれないし、事実その前提なしには城遺構を読み取ることは出来ない。

小谷城跡において、先ず最初に築城の進められた箇所・地点はどこであつたであろうか。

山城の背後に続く尾根筋のピークは防御のうえにも、通信機能を考慮する場合にも欠かせない重要な拠点である。ところが、小谷城跡では、この極めて重要な背後の山頂部である、大嶽山頂が、この城郭群の中でももっとも新しく築かれた縄張り構造を取っているのである。じじつその構造は、堀と土塁で方形に区画・防御することを基本とした、浅井氏最後の縄張り構造であつた。しかし、もし、この大嶽山頂が、小谷城の最後に当る元亀三年に築造されるまでいかなる縄張りもなされることなく過ごされてきたものとしたら、小谷城自体に当初より防御の意思、機能がなかったと言い得るほどに重要な事柄となろう。むしろ予想としては、朝倉が浅井への支援としてここに城を築いたその時期が落城直前の最後の築城であつたことからみて、すでにここには某かの、それももう時代遅れの郭遺構ではあつたが存在していたがために、容易に手が付けられなかったのではなかろうか。この推定を助けるものは、大嶽山頂から小谷山尾根筋に通じる途中の大きな鞍部をなす六坊付近において、縦堀こそあるものの、それに連続する堀切などいかなる遮蔽装置も見受けられないことである。

もし、六坊や金吾丸などがいまだ小谷山に築かれておらず、大嶽山頂のみに城郭が限られていたとするならば、この鞍部に大きな堀切が築かれていた可能性は大きいと考える。そのような堀切が設けられなかったのは、小谷山の城郭とならんで大嶽にも山城が築かれていたことを

暗に物語っているといえよう。それゆえ古い縄張りを踏まえて、朝倉氏が元龜三年に全面改修をはかったものとみなしたい。そして、この山頂に当初あった山城こそ、佐々木六角に攻められたことが文献にうかがえる「オオズク」ではなかったかと思われる。とすれば、その縄張り構造はどのようなものであったであろうか。

現在、小谷城で最古と認定される縄張りは金吾丸のそれである。未熟な土塁は積み上げたものではなく、削土によって削り残した地山がそれで、築かれた場所も郭の一部、尾根筋に直交するかたちから南の一部に続き、L字型に認められるものである。そしてこの削り出した土塁は、さらに南尾根筋の、先のL字型土塁の下に、同じく尾根筋に直交する形で設けられている。そのさらに南はこの土塁に伴う切り岸となって、低い段差が付き防御の施設となるが、この部分に東から半ばこの尾根筋を掘り切る形で幅の広い溝状遺構が食い込んでいる。この城郭は明らかに土塁の整備されてくる以前の築造になるものである。その虎口は、北の番所側からの丘陵山腹を斜めに這うように幅1 m前後の獣道が認められ、これが南の土塁の横に一度屈曲して取り付くことから、通路と推定されるが、とすれば西から少し戻るようにして土塁間を東に抜け郭の東南部を入り口とするもののようである(東南、平野部がわにその身をさらすとすれば虎口としては不用意なものと解し得るが、郭の西側に肩部稜線が大きく後退した個所があり、先の獣道からここへ真直に取り付くことも充分考えられ、測量図の完成をまって再考したい)。

この金吾丸の城郭は、同じく削りだしの土塁を一部に持つ六坊と同じ相対年代に属するものであり、じじつその実年代もこの小谷城では最古期に属するものと見受けられる。その時期とは、大永五年、1525年、朝倉教景にかかる築造のことである。この年、京極氏にとって替わると見越された浅井氏は、南から佐々木六角氏の討伐を受けることになるが、これを阻止するべく支援をむけたのが朝倉氏である。ここに朝倉氏が金吾丸を築城する契機が存在したのであるが、これをもって小谷城の築城開始期と見なすことは困難である。

つまり、金吾丸と六坊の存在からみて、さらには鞍部の堀切の欠如とさらには番所と金吾丸との間での堀切の不存在から考えて、小谷山の頂部・山王丸と大嶽山頂とにはすでに初期の、もしくは同時期に、せいぜい郭と切り岸もしくは斜面が急峻でなければ堀切、堀切堅堀を備えた城郭が築かれておらなければ、大嶽・小谷山全体の構えが説明出来がたいことになるからである。また、大嶽山頂と六坊との境にも堀切、堀切・堅堀が築かれておらないことからみて、大嶽山頂の城郭と小谷山での城郭とが、築城当初から不離一体であったものと推定される。

さて、それでは一体何時までこの城の築城時期は溯るのであるか。この点を解く鍵が、大嶽山の西方、平野部を挟んで琵琶湖側に築かれた磯野山城の築城時期とその契機であろう。

磯野山城は、小谷城から湖北の平野を西におよそ6 kmほど隔たった磯野山の頂上に近い、東に延びた尾根上の一頂部に築かれている。海拔271mと小谷城には及ばないものの、平野部との比高差180mを測る高所である。東西210m、南北最大75mの広がりを持ち、その構造の特徴の第1は、横堀を勿論ともなわず、なおかつ明確な土塁をもたない事である。そして第2の特徴は、尾根筋の前後に執拗なまでの堀切堅堀を設けていることである。尾根筋からの敵の侵攻にかなりの神経を使い防備を施す事である。

この城の城主は、この山城から南東へ尾根筋を下ると、山麓の大森神社の参道脇へ下山し、大きな切り通しを東へ出るとそこは余呉川を隔てての磯野の集落である。この山城はこのような点からみて、磯野氏の詰めの城と予想され、平地城館と対になって、しかもその築城者のわかる数少ない城郭といえることになる。

この磯野山城の築城を考えるのに重要な位置を占めるものが、さきの金吾丸であり、あるいは

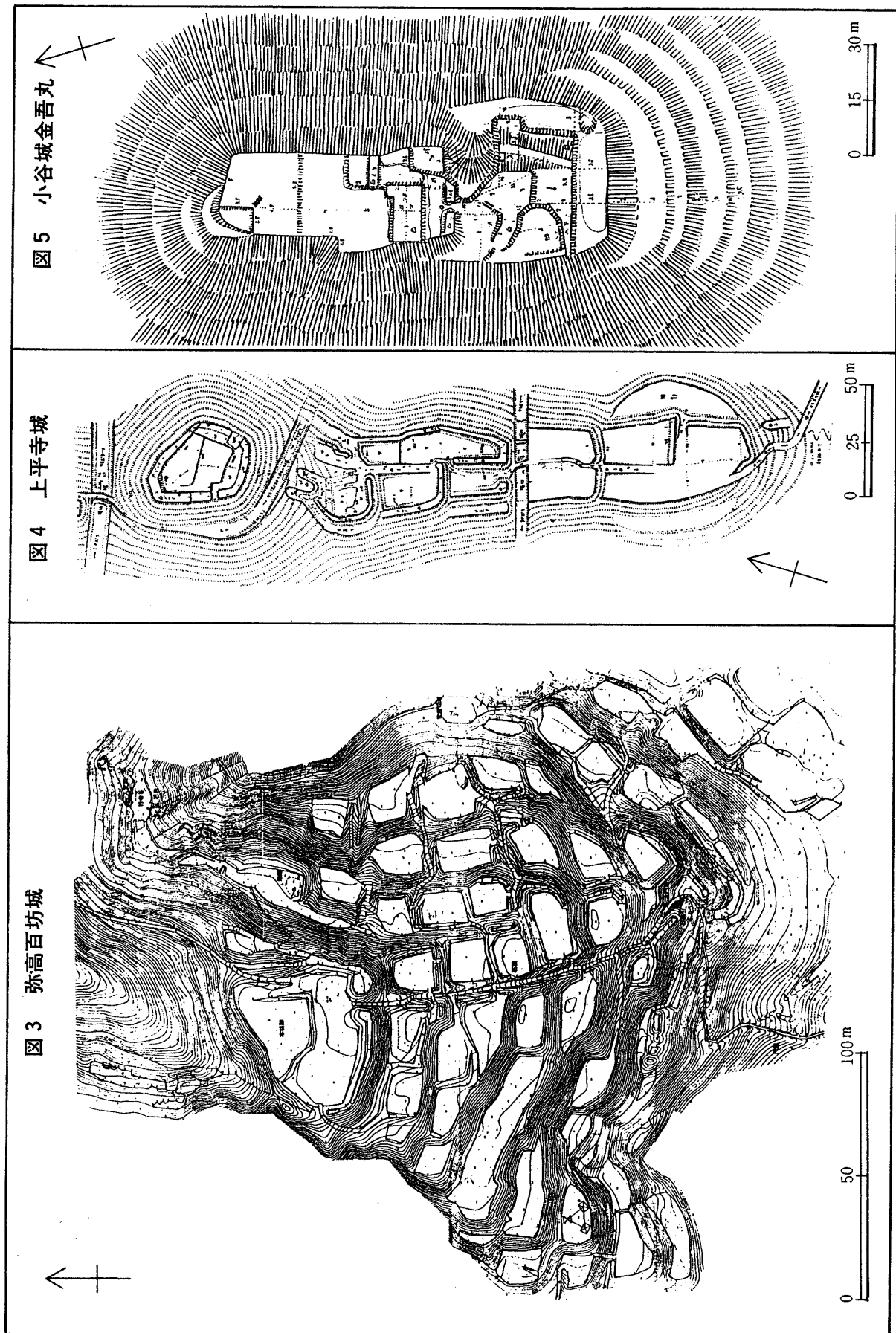


図3・4 (依「滋賀県中世城郭分布調査6」)

図5 (依「滋賀県中世城郭分布調査7」)

は近江八幡市の水莖岡山城であろう。少なくとも、磯野山城は、現在考えられる資料に因るかぎり、金吾丸や水莖岡山城より遡るであろう。水莖岡山城は1508年、永正五年に、十一代足利将軍義澄が、佐々木六角の有力家臣であった伊庭氏とその被官である九里氏を頼って、この城に來たとされ、ここにこの城の築造契機があった。そして、翌年の三月にはこの城内で、のちの将軍義晴が誕生し、同年八月には義澄が病死するといった事件が起こっている。そして、佐々木六角氏と伊庭・九里両氏のあいだがますます不仲となるなかで、1520年・永正17年に六角定頼と細川高国がこの城を攻め、40日間の籠城の末、開城させている。しかし、さらに1525年・大永五年には再度伊庭・九里が立て籠もるが、まもなく廃城となっている。

以上のことから、この城は少なくとも1525年までに築かれたものとすることができる。しかも、その縄張りの所見では、土塁を多用しているにもかかわらず、いずれもが地山切り残しかなるもので、中心主郭の辺縁に所々に認め得るものも幅広く低いがすべて削り出しのものであるし、主郭下のかなり大規模なものもまた明らかに山の斜面を切り残した土塁であることが、その断面形から見て取れる。また、中心主郭を二分する堀切の西側にわずかに認められる土塁が、半ば削り出しで、これが少々盛り土かと思われる程度で、明確ないわゆる土塁といえるものは存在しなかった。このような様子はさきの磯野山城とかなり酷似しており、磯野山城の唯一の土塁状遺構も土塁機能の無いところであたかも堀切の廃土を横に盛り上げた恰好でのそれに過ぎなかった。岡山城のなかば盛土土塁も、機能の面では要所に築かれたものであるが、その形状は類似するところがある。

このような点から見れば、岡山城も金吾丸も磯野山城とは異なり、明らかに削り出し土塁が遺存することから、その下限を1525年に求めることが可能となろう。磯野山城がそれらに先行するものであることは容認されるところである。

では磯野山城はいつまで遡るであろうか。土塁出現の上限を知るためにも重要である。

このことを推定させるものに「養浩庵の記録」がある。ここには「磯野右衛門太夫隣村磯野村の城より永正十五年秋九月、唐河村へ移り住す」との記載が見える。すなわち、磯野氏はその本拠を捨ててこの年隣村へ移っているのであるが、このことは、詰めの城を築いた、すなわち主上に下剋上を遂げようとした磯野氏が磯野山城を降りたことの年次を推定させるものである。つまり、磯野山城の廃城年次をこの1517年に置くことが出来るのではなかろうか。

そして、この磯野氏の謀反を成敗する形で敵対し、大嶽・小谷山に築城を成したのが浅井氏であった。このながれで見るかぎり、浅井氏は主君への反旗ではなく、主君京極氏に下剋上する反逆者磯野氏の打倒を名目に城を築き、足下の有力地侍層を結集して磯野氏を責め立てたのではなかろうか。

このような推定にたつとすれば、大嶽・小谷城は少なくとも1517年以前の磯野山城の築城を追うように間も無く築かれたと見てよいのではなかろうか。

従来は、小谷城は少なくとも大永四年・1524年の浅見氏を倒したころまでには築かれていたであろうとの推定であったが、以上のように更に遡ることになった。このことに関連して一つ注意すべきことは、京極氏から浅井氏への勢力交替の契機に絡まったのその時期である。すなわち、京極氏の在地における事実上の大黒柱であった上坂家信の死が、永正十三年三月であったことは、磯野氏にしても浅井氏にしても、あるいは浅見氏にとっても、反旗を翻す絶好の機会であったに違いない。

結びにかえて

小稿においては、現在調査を続行中ということもあって、考古学的な観点からの記述が十分成し得なかった。しかし、小谷城が日本の三大山城と喧伝されるだけあって、近江北部の城郭群の中でも傑出していることが臆気ながらも判明してきた。さらに諸城との比較を進めその特質をより深めたいと考える。とくに京極氏との山城・城下遺構との比較検討は、寺院構えとの関連もあって重要な課題となろう。

また、今回ほとんど記述出来なかった、天野川左岸から山中にかけての境目の城の分析が今後の作業の一つとなろう。なにを境目の城とするのか、その構造の特質など残された課題である。さらに、山城遺構と微妙な関係にある削平地や堀切、堅堀などの単独遺構の解釈とこれら資料をどのような観点から整理し、歴史の資料としていくのか、この点についても次回以降のなかでまとめてみたいと考える。

なお、小谷城の築造契機を取り上げてみたが、小谷城の遺構からではなく、あくまでも敵対勢力との築城と併せて進められたものとの観点にたって結論を見通した。そして、結果的には、これまで研究者によって否定的に扱われてきた『浅井三代記』を追認する恰好となってしまった。また、文献からのこれまでの考えでは磯野氏の勢力後退は1532年・享禄5年との説が一般的であったが、この点も浅見氏が詰めにしたであろう山本山城の解明がその解決の糸口にはなるであろうが、後に改修されていることから、再度子細な検討が必要となってきたといえる。この点も今後の課題である。

註

1. a. 『滋賀県中世城郭分布調査7(伊香郡・東浅井郡の城)』1989年3月 滋賀県教育委員会
- b. 『史跡小谷城跡—浅井三代の城郭と城下町』1988年10月 湖北町教育委員会 小谷城址保勝会
- c. 『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』1976年3月 湖北町教育委員会
- d. 「小谷城址」『滋賀県史蹟調査報告 第七冊』1938年3月 滋賀県

付 記

小谷城址の調査にあたっては多くの方々のお世話になった。とくに地元湖北町教育委員会(担当山崎清和氏)、高月町教育委員会黒坂秀樹氏ならびに宿舎を提供していただいた大村 仁氏にはご芳名を記して厚くお礼申し上げたい。なお、調査に参加した名古屋女子大学歴史学同好会のメンバーは、矢島くみ子、西 美穂、安藤友規子、斎藤めぐみ、矢木亜希子、野村千鶴の各氏と深貝の7名である。